

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	27 / 2010 / 1-27
タイトル	[座談会] 八甲田山グダリ沼を語る
著者名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

座談会

八甲田山グダリ沼を語る

と き: 2009年3月18日

と ころ: 青森市本町 養老乃瀧

出席者: 岩淵 功、細井幸兵衛、五十嵐正俊(紙上参加)、五十嵐豊、棟方啓爾、徳差幸広、
二唐壽郎、小山内孝、室谷洋司、山道忠郎、石郷岡總一郎

室谷(司会) 本誌「やぶなべ会報」には、これまで青森県の自然環境についてテーマを決めながら座談会を載せてきています。つぎはどんなテーマが良いだろうと話し合ってきましたが、八甲田山の北側高原に謎めいた清冽さを秘めている「グダリ沼」がどうか、ということで一致しました。ここは“ひと知れず”と云いたいところですが、実は著名な作家の作品にも取り上げられている全国区の秘境です。そこで、中身の濃いものにしよう、発言者にはその面のオーソリティーにも加わっていただくことにしました。著書「八甲田の変遷」の岩淵功さん、青森県植物分類学の第一人者・細井幸兵衛さんに出席をお願いしたところ、こころよく応じてくださいました。ありがとうございます。



室谷 洋司

参考資料としてグダリに関連した資料をお配りしました。岩淵さんの「グダリという名前の由来についての論考のコピー」、小山内さんが「青森市史・自然編に執筆し、校正段階のもの」、山道さんが「十数年にわたって撮影してきた植物や昆虫の写真」、「グダリ周辺の地形図と昭和50年の国土地理院の空撮」(7頁に掲載)などです。また、グダリ一帯は今から20年ほど前まで「やぶなべ会」の母体である青森高校生物部の調査活動の拠点でした。当時の調査報告が部誌「やぶなべ」に載せてあり、関係部分をお持ちしました。これらは、必要に応じて座談会の誌面にも引用していきたいと思えます(20頁に掲載)。

今日の話の話題は、グダリ沼の今昔とか植物、動物、昆虫、それに全体を包み込んだ景観などを考えていますが、別にこれらにこだわりません。紹介したい耳寄りな話があればどしどし出してください。

グダリ沼について

八甲田山系田代平の南方に位置する水流で、東西に約600m、幅は広いところで約20m。標高は約590mに位置し、西端で約6万t/日(2000年6月調査)の湧水があり、東端で駒込川に合流する。水温は約7℃で年間を通して変動が少ない。グダリ沼周辺の自然の一大特徴は、この低水温による冷涼な微気候にあり、亜高山帯植物の分布が見られる。その象徴的なものとしてオオタカネバラがあげられる。また、青森県内では唯一スギナモの生育地。南方系と北方系のプラナリアが共に生息する貴重な自然環境となっている。

むかし牛の群れの中を行き怖かった

－ 青森県唯一のスギナモの大群落 －

細 井 わたし最初にここに行ったのは、年代は昭和30年代の初め頃と思いますが、八甲田探検隊というのがありました。三浦雄一郎さんが親分になって酸ヶ湯のバンガローに泊まって、それからグダリに行き上流から下流までずっと歩きました。水がジャブジャブでその辺をグルッとまわって、水がどこから出ているかどう流れているかとか、毒水がどこからどう入ってくるかとか、まあ遊びですね。



細井 幸兵衛

そしてあのグダリ沼のスギナモです。県内では今はここだけで他に記録がない。昔は青森市の八重田にグダリと同じようなキレイな川があつて、人家がほとんどなかったころですが、そこにたくさん自生していましたが今はありません。そのことを何かに書いたはずですが、ほかに証拠として白黒ですが写真とそのとき作った標本があります。だから、グダリ沼はスギナモからしても貴重です。そして、グダリから下るとやがて生物相がガラリと変わります。酸性が強い、例の駒込川の毒水の影響ですね。

室 谷 毒水は、グダリを過ぎてからですね。具体的には、どの辺からになりますか。

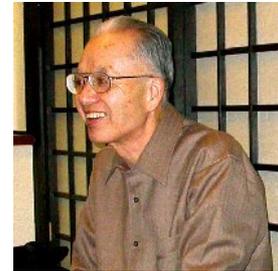
小山内 温泉が入ってくるのです。前に田代分校のあったところがありますね。あそこに行くのに橋があります。その手前のところから湯の川の毒水(強酸性)が入ってきます。これで生物相が変わってしまうのですが、プラナリアなんかを調べても面白いと思います。



[写真1] グダリ沼。南岸から西方の湧水部方向を望む。前方の山は井戸岳・赤倉岳(2009.9.20)

室 谷 この毒水はさまざまな影響がありますね。前の座談会(やぶなべ会報、23号、2008)でも触れていますが、駒込川が下流になって平野部の田畑地帯に入ると、灌漑用水をこの川を避けてどこから取るかが先人の大きな苦勞でした。その毒水が入る前というか上の方が生物が豊かだということですね。それでは岩淵さん。

岩 淵 一杯飲みながらの話は、色々と知恵が出てくると思います。昔、藩政時代に田代で硫黄を採ろうとした弘前の善九郎という火薬師の話もありますが…。私がグダリを初めて見たのは昭和33年の夏です。ここに行くにはスゴイ道路でした。タキギを運んでいる車でワダチができて、それをさらにタキギで埋めている、その上を歩いていきました。熊がいないことはわかっていましたが、牛がいっぱいで、その真ん中を歩いていくのはあまり気持ちの良いものではなかったですね。



岩淵 功

グダリに着いて一番ビックリしたのは湧き出す水の量、あの巻き上げるような水です。その水ですが、どうもその巻き上げる力が今は少なくなったようです。あとでまた…。

五十嵐(豊) 私はグダリについては何にもないのです。高校の生物班の頃はここには行かなかった。卒業してから青森を離れて勤務で方々をまわることになってしまいました。定年になって帰ってきましたが、それからは何回か行きました。昔と今という思い出はないのです。

棟 方 こういう人がいないと座談会は面白くない、あまり詳しい専門家だけだと話は堅くなってしまつて。率直な印象などを出してくれれば楽しい。

徳 差 田代の箒場までは良く行くのです、キノコ採りとか山菜で。グダリは道路からそんなに遠く



[写真4] 赤倉岳より田代平方面を望む(2009. 7. 14)



[図1] 写真4の眺望をコンピュータ作図で地名説明(標高は実際よりも拡大している)

ないということは聞いていますがまだ行ったことがありません。それで私はド素人ですが、グダリという話を聞いて、津軽の名前は面白いし何か突飛な発想があったのではないかと思いました。それで、この資料の地図から形を見て直感的に、これは長まっている、グダツとしている、そうでしょう。こんな印象を第一に思いました。意外と、津軽弁というのはそんなものではないですか。



[写真2] スギナモの生育状態。青森県ではここだけに自生する(2003.8.22)

棟方 同期の二人と違って、グダリは今でも毎年行っています。ホームページでも4回は出しています。その都度、写真を載せています。五十嵐、徳差とも、思い出がないのはおかしい。卒業1年後の昭和30年あたりにキャンプしています。テントを張って、沼のすぐそばにです。今だとまったくの許可できないところです。生きたニワトリを連れていき、それをテリ焼きにして食いました。角だったかレッドだったかウイスキーをグダリに入れて冷やしました。それを飲んで相撲をとり、



[写真3] スギナモの花(2009.9.26)

一人が急性アルコール中毒気味になり番人小屋にも誰もおらず慌てた思い出があります。

それから、今から6年前ですが、当時の原田明夫検事総長を案内しています。感銘を受けたようです。俳句で著名な成田千空のお弟子さん、鈴木ひろ子さん(平成20年度萬緑賞受賞)も一緒でした。バイカモが一面に咲いていて、それを角川書店出版の句集「良夜」に詠っています。ひとつ紹介しますと、

「梅花藻の花 水の上水の中」

さっきのスギナモなどと、ここでないと見られない植物があります。

多くのかたがたにここを紹介したいし、私自身、あと何年生きるか分かりませんが、未来永劫に付き合っていきたいところです。



棟方 啓爾

室谷 そのバイカモですが、ここを特徴づけていますね。この県内での分布はどうなっていますか？

細井 バイカモはあちこちにあります。もうひとつチトセバイカモというのもあります。各地にあるものが、どっちがどっちなのか正確に調べなければならないのですが、奥入瀬のものはチトセバイカモです。西郡の各地にもありますね。標本に作っておいた方があとで同定できてハッキリします。それからどちらも山菜として食べられるのです。

岩手県の遠野などは川がキレイですね。そのようなところにはいっぱい生えています。それからスギナモですが、これはヨソの県でも少なくなってしまうと思います。

青高生物部の調査拠点…水草、プラナリアなど

ー グダリは冷たくて死ぬ思い! ー

小山内 青森高校生物部では夏休みに2泊3日のキャンプをして調査活動をしてきました。これは1年で一番の行事です。やぶなべ会の先輩達はずっと色々な場所でテーマを持ちながら調査をしてきました。葛谷先生と私は1年違いで青森高校に赴任したのですが、最初はベタカイ沢などをやっていてその後、3回目くらいにグダリに行きましようという計画をたてました。1980年頃と思いますが夏休みキャンプを田代の八甲田温泉の前にテントを張って、そこからグダリ沼を調査することになりました。



小山内 孝

最初の年はバイカモがある。すくって見るとプラナリアなどいっぱいいる。種類も多いし何か面白いものが出てくるかも知れない、来年もやろうということになりました。とにかく水が冷たい、プラナリアは何種類もいるのが分かり、種をハッキリさせよう。夜はホタルなんかも調べました。

2回目のときです。葛谷先生がスギナモを見つけました。スゴイ量です、これは珍しいと。さまざまテーマを設けてその後、継続調査をすることになりました(22頁のコラム参照)。

二 唐 あのあたりにオオタカネバラがあるんです。その生態写真を撮りたいと、無謀にもパンツひとつになってカメラを持って半分まで行ったのですが、その冷たいこと。最初は我慢してなんとかモノにしたいと思いましたが。カメラを落とすところでした、凍るようになってしまつて。目の前に花が咲いている、ただ、もし転んだりすると死んでしまうのではないかと。ずぶ濡れで、これはもう駄目だと思って退散しました。だから、まだ写真は撮っていません、ことしは何としても撮りたい、その気持ちでいっぱいです。



二唐 壽郎

細 井 素足だと駄目なんです。ズボンをはいてクツのまんまで入るのです。

山 道 水温は7℃から8℃です。ずっと変わりません、夏で気温が20℃以上になっても変わりません。これでは夏でも感覚がなくなってしまいます。

室 谷 グダリ沼は底からグダグダと水が湧いているんですが、まわりの堰からも水が入ってきていますね。去年の夏にあの沼の縁を歩いていたんですが、草むらに隠れていた深い堰にズボッと落ちたんです。足の片方だから良かったんですが、冷たい水も泥もいっぱい長靴に入ってしまった。泥だらけ、それで靴を脱いで沼の水でズボンを洗い、靴もゆすいだんです。その冷たいこと、二唐さんの気持ちがよく分かります。

石郷岡 私もまだ行ったことがないんです。いつも横を通って行くんですが、ここだ!ここだ!と思いながら素通りです。ですから、ことしはグダリがテーマになったので、できるだけ時期を変えて足を運ぼうと楽しみにしています。



[写真5] オオタカネバラ(2008. 6. 21)

山 道 小山内先生、葛谷先生が生物部員を引率して、八甲田温泉にキャンプし、田代平湿原、グダリ沼を調査したとき、自分の勤務する中学の生物部員十数名を同行させてもらいました。

やんちゃな中学生と高校生と一緒にでは、と迷いましたが、高校の生物部員の中に教え子がいたこと、自分の娘もいたことから、同じ場所にテントを張り、湿原の夜間観察もできました。この頃から私のグダリ沼の観察が始まりました。グダリでの最初の印象として、水が冷たい、バイカモの白い花、スギナモの水面に突き出した緑の塔、そして川面一面に広がったオランダガラシの上を舞う数頭のモンシロチョウが記憶に残っています。

私の関心は虫です、川虫です。こどもたちと小さい生物は何でも採りました。ただ意外とグダリの中をすくっても同じものばかりで種類数は少ない。それは多分、水温の問題かと思いました。そのうち季節ごとに見ていくとさまざまな水生昆虫がいることが分かりました。それでは徹底的にやろうと。ただ問題は、記録するものがユスリカとかトビケラの仲間ですが名前の判定が難しいのです。“何とかsp”としか書けないのが残念です。そのうちにこれらをまとめていきたい、皆さんと明らかにしたい、歳もとってきたが歩けなくなる前にもうちよつとやろうと思っています。

おもに小山内さんはプラナリアで私は水生昆虫ということですが。最近、五十嵐(正俊)先輩に写真の撮り方も教わって、ここに代表的な種の写真をもってきました。植物や風景は小山内さんのもので、ミズムシなどと半々ぐらいです。

一 同 すばらしい写真です。

外来種が侵入、変動激しい生物相

山 道 学校を退職してから小山内さんと年に何回も行き、沼に入るのもおつくうではなくなりました。最近、感じていることは植物なんですが平地にある植物、ギンギシの仲間ですか、写真にも写っていますがその雑草が沼の真ん中にいっぱい生えているのです。まさか自分の足で運んできたのではないかと心配したりして。

小山内 ものすごく変わってきていると思いますよ。

室 谷 沼周辺の植物相の変動というのも考えておく必要がありますね。ことしは、是非しらべてまとめてください。

細 井 その植物ですが、実際採集してきてそれを見ないとハッキリしません。実の形とかを良く見ないと。外来種もありますし。

小山内 生物部員とか山道さんとか、ここにはずいぶん行きました。初めは牛がいっぱいいて、あの冷たい沼にも入ってくるので怖かった。まわりは牧草地で牛が食べていますが、今はぼうぼうと牧草がびこってしまいました、タネがいっぱい飛んで川の方に広がっていると考えられますね。牛は、いなくなっていましたから。



山道 忠郎



[写真6] グダリ沼での調査(2009.8.2)

室 谷 外来種といえば、クレソン、つまりオランダガラシがありますね。グダリ沼につながっているんですが南東方向に湿性のすばらしいお花畑があって、私はもっぱらこの辺で蝶がどのような花に蜜を求めているのか、などを調べています。それで帰りにグダリにも寄るんですが最近目立っていることは、沼のまわりをモンシロチョウがいっぱい飛んでいるんです。モンシロチョウというのはどちらかというと平地の蝶でキャベツ畑などの大害虫です。最近は農薬を使っているんで減ってしまいました。それが海拔600mほどのここにいっぱい飛んでいる。ビックリしました。モンシロチョウはアブラナ科植物に卵を産んで青虫はこれを食べます。それでこのクレソンに大発生しているのではと考えています。クレソンは、何時、誰がもってきた、いやどういふことでここにはびこったのでしょうか。

細 井 クレソンは冷水を好みます。県内いたるところにあります、いくらでも繁殖します。最初は養魚場とかですね。尾上の猿賀神社の周辺の沼とか、そういった場所にはどこにでも広がっています。食べられますから、まわりにあまり人がいないところでは“あずましく”採ってきて食べる…。

棟 方 至るところにあります。誰かがもってきた、ということより魚の放流したとき一緒にとか、さまざまだと思います。

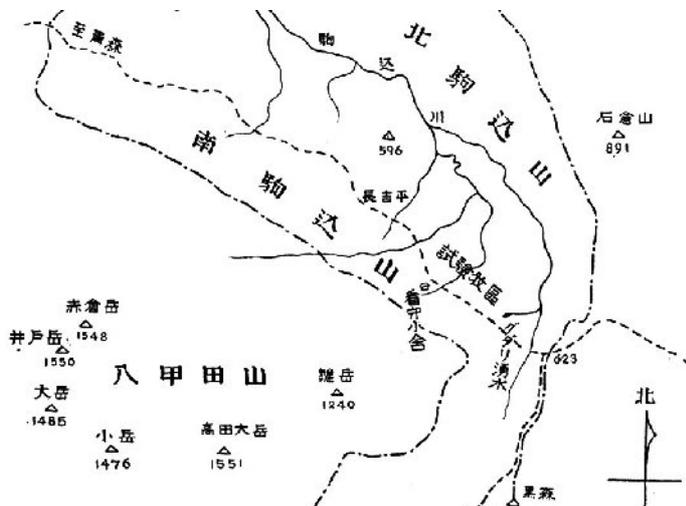
岩 淵 イワナは誰が放したかわかりませんが、ニジマスなどは南部の人が相坂の養魚場からもってくるから、それにくっついて方々で増えたのではないですか。

“グダリ”の名前の由来は？ 三つの考察

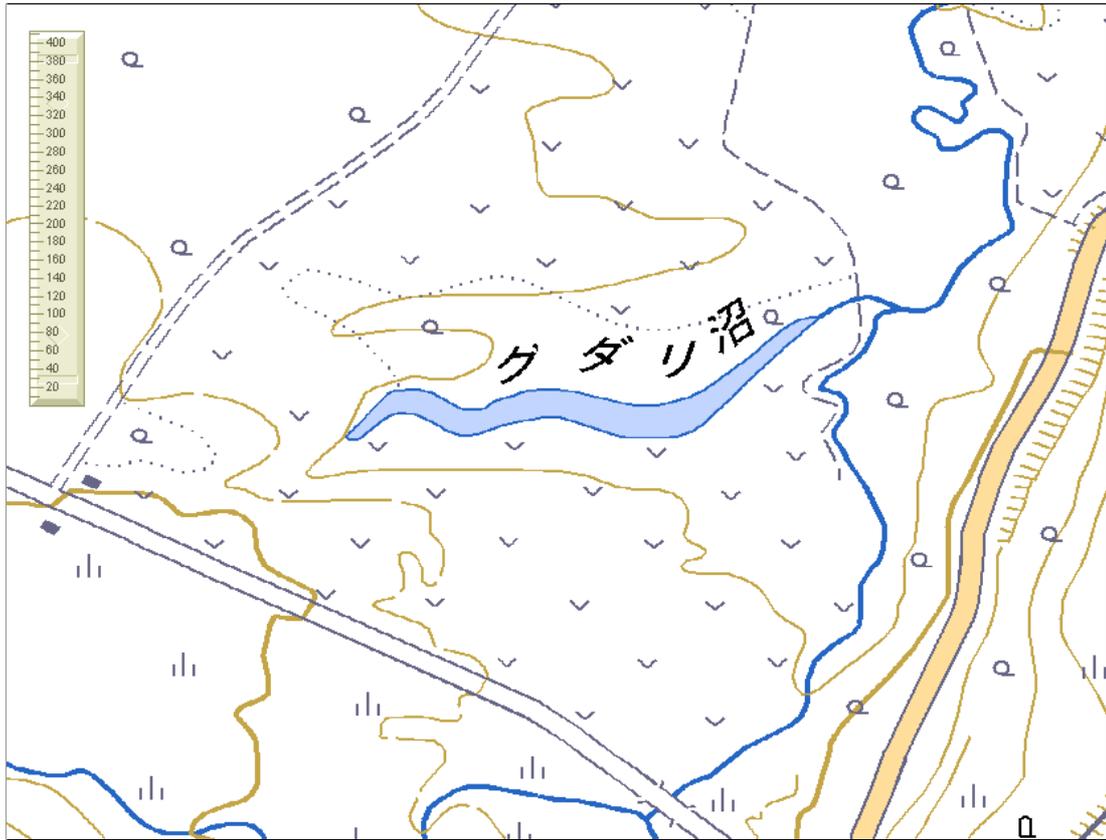
室 谷 それでは、いよいよ深みに入っていきます。 “グダリ”とネットで検索すればズラツといっぱい出てきます。グダリに行った誰もが滅多に見られない風景に出会ったオドロキがそこには描かれています。むかし、井伏鱒二がここに来たとか開高健が文筆をふるっているとかさまざまです。

このグダリについての座談会を開くということで、ちょっと文献などをあさってみました。酸ヶ湯に東北大学の植物実験所ができてから、ここでなければ出来ないテーマとして湿原とか牧野の生態研究がなされ田代牧野も調べられています。この論文には牧野概観図が載っていて「グダリ湧水」となっています(図3)。論文が書かれたのは昭和16年ですからこの当時にはすでにグダリという名前があったことになります。それで、このグダリとは何なのか、名前の由来とかについては誰もが頭をかしげていると思うんですが、あまり深入りしていません。まず岩淵さんから研究結果をお願いします。

岩 淵 グダリ沼というのは古い図面を調べましたが、いっさい出てきません。あの辺の山が図面に出るのは明治40年の国有林の事業図です。田代沼とあり駒込川源流にクダリ沢と書いています。上(ノボ)り下(クダ)りのクダリ沢です。この「クダリ」が「グダリ」になったのは、という推測が一つです。



[図3] 田代放牧地概略図(吉井・吉岡, 1941)の部分。論文発表時の区分図で、中央右寄りの試験牧区の東側に「グダリ湧水」の地名がある



[図2] グダリ沼周辺地形図(国土地理院)。スケールの単位はm



[写真7] グダリ沼周辺の空中写真(1975、国土地理院)

二つ目として、「クダス」という古い言葉があり、これは役に立たない無用の荒廃地をクダスと云っています。クダリとかクダスとかの文法はよく分かりませんが、私はこのクダスと、さっきのクダリ沢とかが“グダリ”に関係があるのではないかと考えています。

三つ目ですが、神潔さん¹⁾という営林局の先輩がいます。私がこの版画(図4)を見せたことがあります。高層湿原があつて沼があつて、この直立しているのはミツガシワです。これを見た神さんは「グダリを描いてきたな」と云ったので



【図4】版画(岩淵功作)。これを見た神潔氏が“グダリだな”と云った

す。確かにそう云ったのです。いまもって残念なのは、そのとき「どうしてグダリなんですか？」と訊けば良かったのですが、何かグダリについて知っていたかもわからないのです。

室 谷 神潔さんという、キノコの研究者でエスペラント語でも知られているかたですね。

細 井 神さん、ここに出てきて説明してください…(笑い)。

岩 淵 色々調べて見て思うのは、当時のひとはあの沼にはそんなに関心を持って見ていなかった。しかも流し木に関係した沢でもありません。恐らく放牧などが始まって、人が入るようになってから今のような名前が付いたのでは、と思います。

由来…「クダリ沢」「クダス」(荒廃地)「神潔説?」、アイヌ語源説、??

室 谷 それではグダリの語源をまとめると、八甲田は明治の頃から放牧が始まったが、あの辺は地形的に平坦なところが払い下げられて伐採された。木々はそれぞれの用途にしたがって使われ、やがて草原に変わった。牛馬にとって水は欠かせないものだし、グダリ沼はそれなりに水場として利用されていた。やがて登山とか釣りとか、観光的な要素も加わって田代沼とかグダリ沼とかの名前で呼ばれることになった。今ではグダリというのはポピュラーな名前ですが、その意味合いがハッキリさせないといつまでもズルズルとなってしまいます。これを機会に岩淵さんに一文をまとめて貰ったらいかがでしょうか(28頁に岩淵論考掲載)。

棟 方 岩淵さんのさまざまな角度からの検証があり、それを文章にまとめるのは大賛成です。それともう一つ、ここで“グダリ”の由来についてほかの説もあげておかないと片手落ちになります。

登山家の根深誠さんが「北の山旅釣り歩き」(1994)というのを書いて、それにアイヌ語源説があります。それはグダリには南端の意味があり、それからではないかと云っています。

小山内 北海道から見て南端ということですか。

岩 淵 アイヌはこっちにもいたんです。

細 井 アイヌはどんどん北に追いやられたということですね。

棟 方 私もアイヌ語説にはちよつと?と思うのですが。そういう説もあるというので示しておかないと。

1) 神 潔(じんきよし、1903~1986) 青森営林局に勤務、青森県のキノコ研究者として「青森博物研究会会報」などに論文を発表

室 谷 北海道なんかの地名にはよくアイヌ語源が多いですね。それで青森県は本州の北端でアイヌ色が強かったことから地名由来をアイヌの言葉に求めることがあるようです。アイヌ説を云うと何となくもっともらしく聞こえるのです。あの世界遺産の白神山なんかでもアイヌ語源説が云われているものですから、私は菅江真澄の200年前の地元聞き取り説、これは雪形に由来するのですが2年ほどかけて徹底的に調べて、地名由来の一つの事例として実証しました。(「白神岳の山名由来」、やぶなべ会報、18号、2005)

棟 方 青森朝日放送に川村昭義さんというかたがいて、グダリの語源について面白いエピソードがあります。彼はどうしてグダリというのか、観光課とか色んな関係機関に確かめたそうです。ところがどこに聞いてもハッキリした答えがない。色々調べたあと奥さんに尋ね、その結びが「ボクのワイフは、流れが下がっているからグダリなんでしょう」と(大笑い)。一生懸命調べた彼はがっかりしたそうです。それから鳴海助一の「津軽のこぼ」を調べて見ましたが載っていませんでした。



徳差 幸広

徳 差 普通の標準語でもグダリというのはありませんね。この言葉からくるニュアンスに何かがありそうですね。

馬立(タテ)場…タデルは飼う、養うの意

室 谷 地名では、このあたりにほかにも、どうしてこんなという地名があります。箒場とか馬立場、火箱沢などです。

岩 淵 箒場の由来は分かりませんが、昭和31年萱野での聞き書きには「箒場には大原専務(酸ヶ湯温泉)の小屋があり馬番がいる、自家発電の設備がある」と記しています。

細 井 八甲田では、箒場平とか田代平と云いますね。

室 谷 箒場には、その名もずばりの茶店というか土産店の「箒場」がありますね。ここの主人の外崎さんが云うには、お婆さんが昭和44年に店を開いたそうです。ここに来たとき、まわりが広々と箒で掃いたようにキレイだったのでこのような名前があるのだ、と聞かされたそうです。

岩 淵 馬立場ですが、普通の解説をするとここまで山の神を迎えに来て馬に神様が乗っかる、そして馬を連れて里に下がると農業の神様になるとか、正月にそこまで行くと神様が乗り移る、そのような場所だと民俗学では書いています。ところが津軽ではどうか分かりませんが、南部では馬を養うということ、馬をたでると云いますね。

室 谷 馬だけではありません。青森の田舎でもマッコ(馬)をたでる、ベゴ(牛)を、ウサギをたでるで、何でも「タデル」、「タデデイル」と云います。

岩 淵 たて山、たて林とかも云いますね。「オレの家でタデデイル馬」とか、そういう云い方をする。それで、津軽・南部両藩の御牧の一番の違いは、南部では馬を放す、そして監視人が何処に行っただかなどと後を追って探す。ところが津軽では夜になると一箇所に集める。その集めるところが馬立場になります。南部は放し飼いで、津軽では手をかけながらやっている。尻屋の寒立馬が良い例です。余談ながら寒立馬ですが、宮中の偉い役目をもったひとにカンダチメというのがあり、馬にはもったいない。

津軽では夜になると一箇所に集めるとか監視人の目の届くところで飼いますが、南部ではそうではない、それで狼に喰われる数が全然違います。今の馬立場あたりは明治以降の放牧ですが時々、あそこで見守りながらやっていた場所、そこで塩をなめさせたりしたのでしょう。それからあの近くに良い沼がありましたね、その水場ですよ。

細 井 あります、今でも小さくなって。

山 道 二枚貝がいるとか、メススジゲンゴロウがいたという話があります。

岩 淵 あの沼の周りにはダケカンバがあって、ダケカンバ越しに前岳を見ると、なかなかの景色です。

室 谷 火箱沢はどうなりますか。

岩 淵 火箱沢は駒込川、荒川、横内川、六枚橋川、蟹田川などと可成りあります。火箱と書いていますが由来は分かりません。

牛馬の放牧は明治時代から

室 谷 放牧は明治の時代からですね。藩政時代はどうですか。

岩 淵 南八甲田に放牧が始まるのは明治30何年かです。駒ヶ岳下の大田代の湿原とかは、本来は乗鞍岳から南の方に放したのですが、彼(牛馬)らは凶面は読めません(笑い)。どこでも歩く、山の中でも原っぱでも牛馬は歩きます。こっちの田代の放牧もその頃ではないかと思えます。というのは井伏鱒二が書いていますが、案内した番頭がここは南部の人が放すんだ、と云っている。津軽のひとはここに牛馬を放さないのです。

細 井 私の親父が若いとき、黒石のひとから聞いたそうですが、秋になれば牛を集めなければなりません。どこにいるのか情報がこっち(津軽)から南部のひとへ、南部はこっちへ、とどこかで情報を交換しながら探していったそうです。南部のベゴ(牛)でも津軽のベゴでも、どこのベゴでもいい、最後には回収しないとどうしようもない、せつかく太らせたんですから。

【コラム】 萱野高原と田代牧野の成立

萱野高原

土地の人の言によると、一帯の樹林は相応に古く伐採され、その後引き続き永く採草地とされていたという。すなわち当時は一面にススキが生い茂り、萱野原という名も之がために起こったものである。10数年前(編集者注:本論文発表時から)からここに多少の放牧が部落民によって行われたことから次第にススキを減じシバ地が増加した。昭和10年からは付近5か村の共同放牧地として約100町歩が使用されることになった。現在(編集者注:本論文発表時)の放牧頭数は馬70~80頭、牛20頭内外であるが、例年20~30頭ほどの牛が近くの田代放牧地から侵入するという。

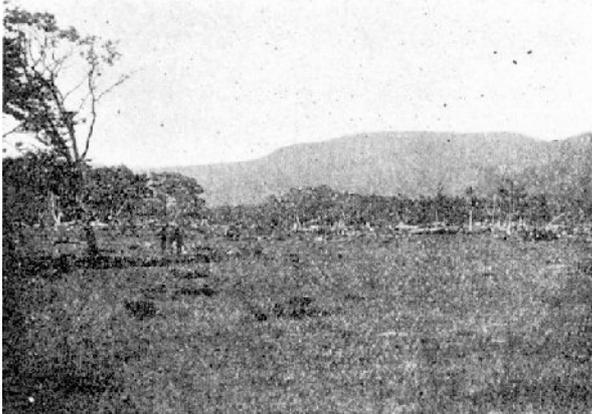
(「牧野の生態学的研究(1)萱野原放牧地」吉井義次・吉岡邦二・岩田悦行.生態学研究,第6巻25~48頁,1940から)

田代牧野

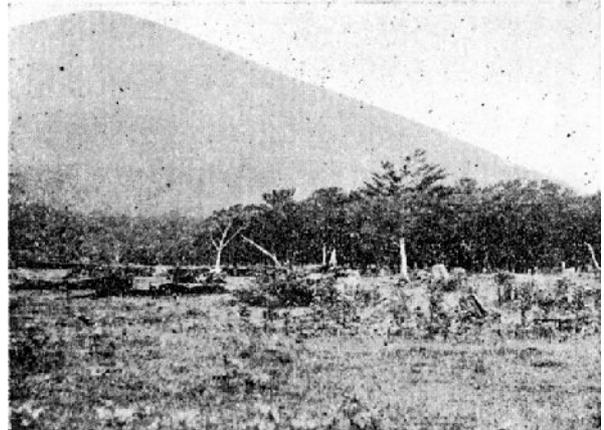
ここは明治初年から放牧が行われ、一時陸軍軍馬補充部の用地となったが、後に農林省に移管され、数年前(編集者注:本論文発表時から)から再び民間の放牧が許された。面積は3000余町歩を占め、うち142町歩は試験牧区として特別に管理され、残りの2860町歩が普通放牧地となっている。

(「牧野の生態学的研究(3)田代放牧地」吉井義次・吉岡邦二.生態学研究,第7巻74~88頁,1941から)

《 写真に見る昔の田代平 》



[写真8] 第2試験牧区の景観(吉井・吉岡、1941から) 論文発表時から約10前の伐採地



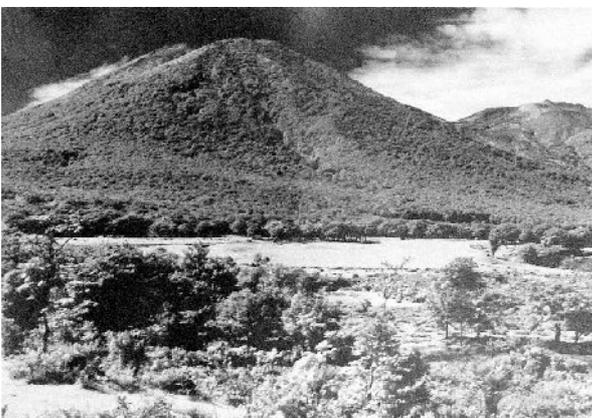
[写真9] 森林伐採跡地の景観(吉井・吉岡、1941から) 論文発表時の状況で後方が雛岳



[写真10] ヤチハンノキ林地の伐採跡の景観(吉井・吉岡、1941から) 論文発表時の状況でヤマドリゼンマ・レンゲツツジが叢生する



[写真11] 昭和20年代の田代高原。前方中央が大岳で、手前には伐採後の切り株が残り放牧牛が寝そべっている(売店・箒場提供)



[写真12] 昭和20年代の田代高原(売店・箒場提供)



[写真13] 昭和45年の田代高原、牛放牧がされていた(室谷洋司撮影)

岩 淵 田代は今みたいに乾いてはいなかった。北海道と同じようにヤチにはまって見えなくなる牛もいる。恐らく津軽のひとはあそこに放さないのではないか、酸ヶ湯の大原さんなんかの時代になると田代にも放すというけど。その前の藩政時代は温泉まで行くが、それからはふけた土地で南部との往来は堅雪のときでないといけないと書いています。

室 谷 南部と津軽の話が出てきましたが、明治時代から放牧が始まった、それから文献を見ると昭和26年に営林局が払い下げたとかあります。

岩 淵 あれは緊急開拓や牧野のために営林局から農地局に所属替えをします。そしてそっちの方から払い下げたことになります。

室 谷 昭和27年に牧野組合とかができていますね。田代の入口、箒場に土産店がいま3軒ありますね。あの一番手前の店の外崎さんが云うには、むかし秋田のひとがここにきてよく撮影していたそうです。年代ははっきりしませんが当時の写真を呉れたそうです。これがそうです、大岳などをバックにした、手前がふもとでブナ林から高原です。伐採して何年かたって切り株がまだいっぱい残っていて、牛が寝そべっていますね。ここ一帯はその前までは原生林であったことを示しています(写真11、12)。それからさっき紹介した東北大学の研究者による田代牧野の論文に載せた昭和16年より前の写真です。印刷が不鮮明ですが当時の状況が良く出ていると思います(写真8~10)。

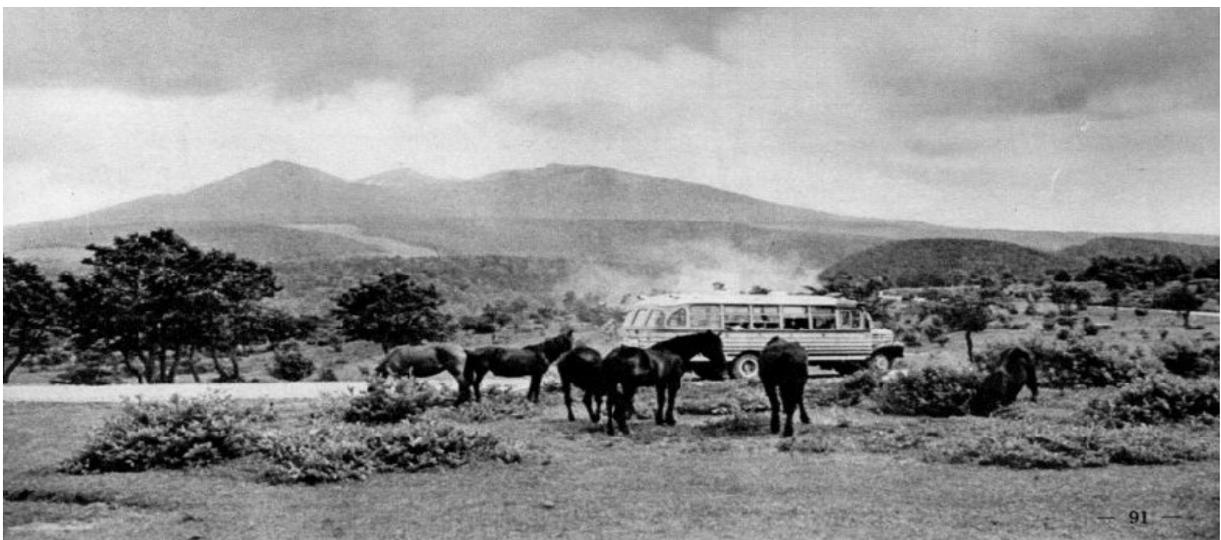
小山内 これは貴重な写真です。あの辺はずっと林です、沼のあたりは溪畔林だったでしょう。

岩 淵 ブナとかイタヤカエデは流し木に出した、ところがナラなどは重いから出せない、炭を焼くのはずっと後になります。

高原、草原の多くは人為的な植生

棟 方 常識的にあの辺が昔から草原とかであったとはあり得ません。日本では天然の草原は高山帯とか海岸の一部とかにはありましたが、あとは野焼きなど人工による草原でしょう。

岩 淵 典型的なのは八甲田山の入口の萱野高原ですが、あれはシナノキとかナナカマドなどを残し、燃料になるものはみな切ってしまいました。



[写真14] 昭和33年頃の萱野高原(青森市勢要覧、1958から)

- 室 谷 それで田代の場合は林が切られて放牧になったが、その中のグダリ沼のところは牛や馬が水を飲みに行ったのでしょうか。
- 棟 方 登山とかの普及と同じで、当時は生活に直結しないものは無用なもの、それできょう岩淵さんからいつグダリという名前が出たかで謎が解けた気がしました。いやあ、この写真は良い写真ですね、萱野なんかの写真はないでしょうか。
- 岩 淵 萱野を最初に見たのは昭和30年頃です。当時は、残された木はショボショボの貧弱なものでした。いま見ると均整のとれた木になっています。
- 棟 方 それから、ヤナギランですね。萱野にもありますが田代は有名です。あれは火が入ったとか人工的な要素が非常に強い。それでファイヤー・ウィード(Fire Weed)とも云っていますね。
- 岩 淵 ヤナギランが生えていると、ここは火が入ったということです。深田久弥は萱野高原が一面のヤナギランだったと「陸奥山水記」に述べています。
- 徳 差 ああ、そうですか、人工的にですね。

井伏鱒二・開高健両大家でグダリが全国的に

－ 対決はグダリのイワナに軍配! －

- 室 谷 地名の由来からして謎がハッキリ解けないグダリ沼ですが、それが全国的にも知られています。さっきも出ましたが、井伏鱒二²⁾とか開高健³⁾の功績もありますね。これは、三浦敬三さんが連れてきたとかですか？
- 棟 方 井伏は津島文治⁴⁾が知事時代に連れてきました。青森県近代文学館が平成8年10月に特別展として「十和田湖をめぐる近代文学」を開催していますが、十和田・八甲田を訪れた有名人などについて来訪者年表としてまとめています。それによると「昭和24年6月、井伏鱒二は青森県知事津島文治の要請により来県、二週間ほど滞在して酸ヶ湯・田代・蔦・奥入瀬・十和田湖などを取材した」とあります。そのときのことを「川釣り」という作品に書いています、鹿内仙人⁵⁾も出てきます。
- 室 谷 文章は酸ヶ湯温泉を基点にしている、あれを読むとそこからグダリは南下して行って猿倉とか蔦の方角になっている。
- 棟 方 そうそう可成り間違っている、まあ文学作品ですから位置関係はどうでも良い、昭和27年出版になっている。深田久弥が「文学界」(昭和12年8月)に「八甲田高原」を書いています、この高原は萱野高原で、残念ながら田代高原ではないですね。
- 岩 淵 詳しくは分かりませんが、「鮎の友釣り」で知られる佐藤垢石⁶⁾もきたことがある、と蔦温泉の番頭から聞いたことがあります。ずいぶん前のことだと思いますが。
- 室 谷 ちょっと横道にそれますが、今年は大宰治⁷⁾生誕百周年でさまざまなイベントがあります。大宰は文治の末弟です。大宰は確か井伏に色々と面倒を見て貰っています、そうすると三角関係で文治と井伏のつながりが出てきて、それが八甲田・十和田湖招聘につながるのでしょうか。

2) 井伏鱒二(いぶせますじ、1898～1993) 小説家、1938年直木賞、福山市(広島県)生まれ

3) 開高健(かいこうたけし、1930～1989) 小説家、1957年芥川賞、大阪市生まれ

4) 津島文治(つしまぶんじ、1898～1973) 初代青森県民選知事(3期、1947～1956)、五所川原市(金木)生まれ

5) 鹿内辰五郎(しかないたつごろう、1880～1965) 通称・八甲田の仙人、15歳から60年間、八甲田の案内人。郡場寛、大町桂月らを案内、棟方志功と親交あった。青森市(浜館村)生まれ

6) 佐藤垢石(さとうこうせき、1988～1956) エッセイスト、釣りジャーナリスト、前橋市(群馬県)生まれ

7) 大宰 治(だざいおさむ、1909～1948) 小説家、五所川原市(金木村)生まれ

棟方 そうです。私は太宰の存在が井伏・開高グダリ沼訪問の基因になったと考えています。言い過ぎかもしれませんが、井伏鱒二の「川釣り」とか開高健の「高原の鬼哭」は、太宰治が遠因だと云えるのではないのでしょうか。



[写真15] グダリ沼でイワナを釣る人。この日は3匹を釣り上げていた(2009.9.20)

太宰と井伏は太宰が上京し東大入学後師弟関係にあり、太宰が自殺など色々面倒を掛けたにもかかわらず仲人もして私的にも色々面倒をみてやったのですが、入水自殺の遺書に「井伏は悪人である」と書いてますね。

一方兄の津島文治は井伏とは早稲田大学同期でしたから、一連の事件で井伏に恩義を感じていたでしょう。太宰入水自殺のとき県知事でしたからこれが招聘に繋がったと考えるのは自然かと思うのです。

室谷 開高健についても続けましょう。

棟方 井伏と開高は文壇、趣味釣りの両面、公私にわたって親睦があったようです。開高はずっと若くて年代的にも違いますが二人は重なっています。「私の釣魚大全」の中でグダリ沼が登場する「高原の鬼哭」(1969)で書いています。

井伏は小さなバツで釣りましたね、それで結局は1匹も釣れなかった。さすが、開高は大きなイワナがいるという情報で最初からフライで狙っている。旅に出る前に小さめのマドラを用意して、マドラって分かりますね、疑似餌です。最初から大物を狙ったんです。ところが、読んでいくと、

「小一時間ねばったけれど、結局イワナは釣れなかった。

遊び疲れた僕は、岸辺の草の上に腰を下ろし、麦藁帽子を脱いだ。

汗ばんだ首筋を一陣の秋風がすりぬける。

高原に群生するタンポポを揺らすこの風は、やはりヤマセなのだろうか…。」(大笑い)

室谷 両大家によってグダリ沼が全国に知られたことは誇らしいことです。ただ欲張りすぎたようで釣果がちょっとお気の毒ですね。この対決を見たとき、グダリのイワナは立派と云いたくなります。実際、ここは難しいのですか？

細井 私の実話です。青森の昔の石田スポーツのオヤジさんと私とか、スキー・クラブの連中と10人ほどで行きました。牧場の管理小屋に泊めて貰って、その晩のおかずなんですけど2匹ずつ酒の肴が付いたんです。大室さんという名人がいてここで釣ってきてくれました。

小山内 あの頃はいたんですが、今は全然ダメです。放流したニジマスとかがいますが。

室谷 その実際の釣りの話しですが、今日の座談会を心待ちにしていたひとがいます。五十嵐(正俊)さんです。ところがこの冬はずっと伊勢に滞在していて、参加できなくなりました。「私のグダリ」をメールで寄こしました。

五十嵐(正俊) 兄が上北鉾山にいた頃、私は鉾山から歩いてグダリ沼を目指したのですが、日中は暑いからと鉾山出発を午後3時頃にしたらのが悪く、田代の送電線下に到着したころには日が暮れ、キャンプせざるを得なくなりました。道も良く分からず翌日はグダリ沼のかなり下流まで辿り着いて2泊目のキャンプをしましたが、結局はグダリに着けませんでした。

今考えると残り数百メートル地点まで到達しながらグダリ沼を見ぬまま鉦山に戻ったことになります。帰路途中の細流で7、8匹のイワナを釣りあげて、一応の目的を達成し朝食のおかずにする事が出来ました。

それ以来、多少のイワナ釣りのテクニックはマスターしたつもりですが、グダリ沼の釣りは非常に高度なテクニックが必要で、大きなイナゴなどを餌にしても釣りにならず、胴長で川の中に立ちこんで長い竿に数mの道糸と1本の袖型の釣り針に付近を飛び回っている小型のガガンボを付けて、ガガンボの足が水面に着くようにバイカモの隙間を流すのがコツです。イワナが食らいついたら、一気に引き抜かなければ水草の中に持っていかれてバラしてしまいます。事実、鉦山の釣り師たちは腰まで川の中につかりながら豪快に水音を響かせて、尺もののイワナを釣り上げていました。その後、普通の4.5m程度の溪流竿でもモノにすることができると分かりました。

五十嵐(豊) 兄貴ふたりが、このように上北鉦山からグダリで釣りというのは全然知りませんでした。私が中学生の頃だと思えます。

室 谷 お兄さんの正俊さんは、グダリの釣りの実話をさらに具体的に書いています。

五十嵐(正俊) その後、グダリでは本流で3匹を釣り上げました。箒場から真っ直ぐ川の方へ向って歩くと開口部分の細流は狭いけれども水面下で大きくえぐれているところがあり、川幅より大きなイワナが潜んでいました。ここでは普通の釣り方で簡単に釣れたのです。当時小学生だった甥でも簡単に釣ることが出来ました。ところがグダリ本流では全く釣りにならないものですから、夢の中にカラー版のグダリの風景が現れ、うなされた記憶があります。



五十嵐 豊

上北鉦山から歩いて行ってから数年後、火箱沢林道を歩いてグダリ沼のほとりでキャンプを張りました。初めはさっぱり釣りにならず、夕方、岸を歩いていると水草の間に流れの関係で泥が堆積している場所があり、大きなイワナが2匹底を突いていたのです。流れの表面をバツタを餌に流しても70~80cm底を突いているイワナの視野には入らないようでした。そこで、流れの底に餌を待って行く必要を感じたのです。針からバツタを外し、小さなヒシバツタに切り換えて、針の重さで底に沈めることに成功したのです。

イワナの目の前にヒシバツタを誘導しますとパツと餌のヒシバツタが消えたのです。すかさず合わると針掛かりさせることに成功しました。結局、同じ手法でその2匹のイワナを釣り上げることが出来たのです。これがグダリ本流での初釣果でした。翌日にはカワゲラの成虫を餌にして水草の隙間に浮かべるとバシッと反応しました。30cm近い大物でした。運が良ければ4.5mの普通の釣り竿でも釣れますが、普通のテクニックでは非常に難しいのがグダリ沼の釣りだと思います。

グダリの凄味…大量の湧水がすぐ流れに

— 最近は水量が減ったのでは? —

室 谷 グダリの生物とか景観などについて昔と今は変わったのか、あるいはここの希少性について話を進めましょう。

小山内 このスゴイところは、いきなり大量の水が湧き出て、それが広い川になるというのが大事です。富士山の柿田川と同じで、沼と云っているがいきなりどっと川になる。

五十嵐(豊) 沼というのは水が溜まった所を云いますね。何でここを沼というんでしょうね。

棟方 水が少なくなったと一般に云われていますが。

小山内 湧水量の調査はそれぞれの季節で4~5回やらないと分からないし、これも継続して調べないと何とも云えない。青森市の水道局でやる必要があると思いますがまったくその気配がないと思います。流速と水量のデータが欲しいのです。

棟方 いや、データがなくても明らかに水が少なくなってきていると思います。昔、と云っても何十年か前の話しですが石を渡ってグダリの中心部までは行けなかったでしょう。それが今では渡って行ける、ということは水量が少なくなった。

山道 市の水道局を弁護するわけではありませんが、何年か前に調査していたと思います。公表されていないから分からないだけ。

【コラム】 「東八甲田地区「自然の保全と利用」基本構想」

— 身近で多様な自然のワズユースを目指して — (平成13年12月、青森市発行)

この報告書は、グダリ沼、田代湿原、田代平少年の家、田代平キャンプ場などを取り上げている。

グダリ沼についての記述の概要は、この沼を中心としてデリケートな自然環境が残され、第2種特別地域で南側草地は乾燥化している。両生類の生育環境が悪化している。県道北側は良好な自然草地が残されている。北岸の樹林を保全する。県道南側の自然草地を保全活用する。グダリ沼周辺の自然探勝、野鳥観察等、周辺草地は環境教育の場として活用。環境教育フィールドとして整備する。一般利用者の利用は、グダリ沼手前までとする。探勝歩道の整備。駐車場、トイレの整備、としている。

その具体的な周辺整備の方向性としては、

- (1) 駐車場・トイレ・案内板: 田代牧場入口付近に県道からアクセスできる駐車場を設ける。案内板を設置しグダリ沼の位置や沼と周辺の自然情報、また東八甲田地区全体の情報を提供する。リーフレットの配布場所等も設けて保全の考え方の普及啓発や多様な自然情報を提供する。付帯施設としてトイレを設置する。
- (2) 南岸歩道: 一般利用者を中心とした湧水ふれあい利用コースとして、駐車場からグダリ沼南岸及び北岸上部に至る歩道を設置する。ここは湧水の核心部分であり、利用者が求める湧水を直接見て水に触れることができるような岸辺のアクセスポイントの整備を行う。なお、路線や路体は北岸上部から見た場合の景観に配慮した最小規模のものとする。なお、おり返し部にはゲートを設けて、そこから先は環境教育の活動フィールドであることを明示し、利用にあたっての注意事項等を掲示する。
- (3) 南側環境教育フィールド: 南岸歩道の折り返し地点ゲートより、駒込川に出て沿川を遡上するコース。さらに、県道南側の自然草地や駒込川を巡って駐車場に至る利用コースを設定する。駒込川水辺探勝を中心とする環境教育コースとして利用する。川での水遊びやヤナギランなどの群生地を楽しむコースとなる。環境教育としての利用形態や利用規模から、歩道の整備は行わず、現状の踏み分けみちなどを許容範囲の中で利用するものとする。
- (4) 北側環境教育フィールド: 駐車場を拠点として北岸の樹林や小規模草地を利用するコースを設定する。一部は水場跡や水辺、樹林、草地などを巡る環境教育コースとして利用する。また、田代牧場管理道路を利用して北部の田代平少年の家との連携利用ルートの一部とする。

室 谷 データがあるのかないのか調べてみる必要
がありますね。なければどうするか、ということ
だと思います。水量のほかに、むかしここに
行ったところと変わったことはありませんか。

岩 淵 昭和33年ですが、斉藤さんというかと歩
きましたが、当時とくらべて泥が入るようになり
ました。それは放牧と関係がありますね。それ
でそこに柵を回したらどうかとも思いました。た
だ、今は放牧はしていないわけですから。



[写真16] グダリ沼湧水部の一つ(2009.6.28)

室 谷 青森市が「東八甲田の保全」という提言書を平成13年にまとめています。これは環境省が
全国的に自然環境の保全という風潮が高まって、その予算で青森市が事前に生物各分野
の専門家に依頼して調査をし、それをもとにまとめたものです。調査メンバーには「やぶなべ
会」の会員もいますので聞きましたら、それなりの費用をかけてやったら提言書を見てもカ
ラ一頁などがあって、ちょっとやそつとでは出来ないものです。

そのなかで青森市の天然記念物指定の田代湿原とか、きょうのテーマになっているグダリ
沼も貴重な景観として提言がなされています。グダリ周辺では牛の放牧が景観形成に必須
事項としていますし、そのほかさまざまな構想を示しています。こまごまと紹介するつもりはあ
りませんが、それから10年近く経過して何ひとつなされたものはないようです。金をかけて机
上のシナリオを作っただけで結局はなにもしなかった。(17頁コラム参照)

山 道 牛がいなくなった。あの頃は糞がいっぱいとか草を喰うとかで、それからの変化は相当は
げしいと思います。牛がいた頃は糞とかが相当沼に入ったと思います。その頃と比べると動
物相が変わってきたと思います。汚いところにいる甲殻類のミズムシ、綺麗な流水にいるの
がヨコエビなどです。水の汚れがなくなったので、ミズムシなどが減ったのではないかと思っ
ていたらそうでもない。ずっと前からいたのか、1回住みついてからずっといるのか、牛がいた
ときの遺産として残っているのか、この辺は継続調査が大事です。

細 井 ホタル類は、何種類いるのですか。

山 道 尻が光るのが3種で、そのうち水のなかで生活するのは2種です。

細 井 私、あちこち南八甲田などでキャンプしていますが横沼でキャンプしたとき、夏ですが酔っ
ぱらって水を飲みに行くとき小さいホタルがいてビックリしました。飛んでいました。

山 道 地面を這っているのはマドボタルですが、飛んでいるのはゲンジボタルとヘイケボタル、ヒ
メボタルです。ゲンジは高いところにはいないから、山間に多いヘイケと幼虫が陸生の貝を
食べているヒメボタルの可能性ですね。ヒメボタルは田代の元湯あたりでも見えています。

私、興味があるのは気温の低いところでは、ホタルは親になるまで1年だけでなく何年か水
のなかで過ごして成虫になるのではないかと考えています。横沼は調べていません。

オオタカネバラは冷涼地の証明

－ 望まれる詳しい調査 －

室 谷 植物から見たグダリはどうなりますか。

細 井 ちょっと面白いのは、ここにハマナスの記録があります。あちこちで放牧されたでしょう、それで出てきたのではと思っています。昭和10年に村井三郎⁸⁾さんが「十和田湖八甲田山の植物」を書いていてこれにもハマナスが載っています。私なりに考えているのは、昔、お盆にハマナスなど色々な花を採ってきて最後にはそれをまとめて川に流しますね。途中で流れつければそこで芽を出して花を咲かせる。



[写真17] オオタカネバラ(2008.6.21)

八甲田山では3箇所ほど記録があり、酸ヶ湯付近とか田代のヒバコ沢林道を行ったところがありました。花は咲いていませんでしたが、標本を残しています。

岩 淵 私も山中のハマナスの分布を図に描いていますが、青森と岩手はどうやら牛馬と関係があるようです。

細 井 それからさっき話題になったオオタカネバラがどうしてここにあるのか。あれは水が冷たいからだと思います。地表が夏でも温度が上がりにません。

岩 淵 これは一般に風穴植物としてそういうところにあるのですが、南八甲田では風穴でないところにもありますね。

二 唐 黒石の黒森山ですが、あそこの風穴に写真を撮りにいきました。ところがグダリ付近にもある、何で?とと思っていましたが温度の関係なんですね。

岩 淵 それが理屈でしょうね。秋田県の大館に近いところに長走があつて、ここのオオタカネバラとグダリのものを良く見たら長走の実は三日月型がほとんどです。ところがグダリは丸い。

細 井 グダリばかりではない、白神山地も丸い。北上弥逸という岩手の人が村井さんの標本も調べて見たし、私も南八甲田のものを調べたが、三日月型が一般的だがときどき丸いのが出てきます。なぜそうなのかは分かりません。

それから、オオタカネバラのような目立ったものだけでなく、もっと細かいものにも注意して見る必要があります。カヤツリグサとかイネ科の植物はぜひ採って標本にしておいてください。変わったものが出てくる可能性があります。

室 谷 グダリ沼周辺だと植物相は割と単調ですね。すぐ近くの私が良く行くお花畑はバライテイに富んでいます。グダリ沼を囲んだところは元は溪畔林だったそうですが、こっちの方は湿っているで昔からの植生が残っているような気がします。

細 井 そこは行っていません。今年は是非、行きたい。県内を見ると詳しく調べたいところがいっぱいあります。

棟 方 前に生物部が調べた目録を見ると落ちているものが多いし、また間違いも見られます。この辺も考えながら調べて見る必要があります。ここにはエゾズミがいっぱいありますがこれが載っていません。ヒメリンゴとか云っていますが、これはエゾズミです。

細 井 ここには、エゾクロウメモドキもあります。エゾはクロウメモドキの葉が大きいもので青森から北海道に分布しているのが学名上の基準種です。

8) 村井三郎(むらいさぶろう、1909~1982)青森営林局、林業試験場(青森支場長)、東北林木育種場(場長)に勤務、「十和田湖・八甲田山の植物」(1935)や論文多数、農学博士、盛岡市生まれ

青高生物部の調査

－ 目立つ水生植物の量的変化 －

小山内 この植物では水生植物が特徴的なのですが、生物部が調べた図5を見てください。

ここでなぜ水草を調べたかという、バイカモ、スギナモ、ハイコヌカグサ、オランダガラシの4種について年次によって生育状況が違っていたからです。葛谷さんと何回かここに行って調べたがオランダガラシが埋め尽くすほど増えていた。これは大変だ、水草の変動が激しいので在来種のスギナモやバイカモがなくなるのではないかと、研究対象にしようと相談しました。2つの計画を立てました。プラナリアと水草の変動です。

ここは、もともと砂泥というかずと下流部の所が泥です。上流部の所が砂質です。下の方が幅が狭く急流になっています。この後で湯の川の強酸性の毒水が入ってくる。水草の変動が激しいので記録をして見る必要があるのでは、何年か調査しよう、それがこの図です。下の方はスギナモが多かったが(砂泥の方)、それが少なくなってくる。図でそれが分かります。水草の変動が激しいし、それと同じくプラナリアの変動も激しい。ただ、色んな条件があるのでしょうか、その後、オランダガラシは少なくなり今ではもっとも少ない状態が続いています。

山 道 オランダガラシは端っこにしかない状況ですね。それが今も続いています。

小山内 昔は風倒木が横になっている、あの辺がすごかったですね。それが放牧をやめてからハイコヌカグサが増えてしまって水の中にまで入ってきたのには困りましたね。

細 井 あれはすごいです。尻屋の標本で大井次三郎さんが判定しましたが、今ではどこにでも増えています。

室 谷 プラナリアについて詳しくお願いします。

小山内 プラナリアの変動は、まず川勝正治さんというプラナリアの分類の大家がいて5種いると話したら、これはすごい場所だという。それで、どういふ実態かキチンと調べるようにとアドバイスがありました。

石郷岡 私は青森高校生物部の調査結果とか、ほかの資料から生物目録を整理して見ましたが、まだ不備ですね。どのテーマも1年では終わりません、何年かかけることになるでしょう。

棟 方 プラナリアのもっと詳しい話が聞きたいですね。

小山内 これを話すには2時間はかかります。簡単に話しますとこれは水中の石の下にいる淡水性の三岐腸類で、特殊な生活環境をもっています。ひとは冷水性です。大きさはせいぜい10ミリくらい。

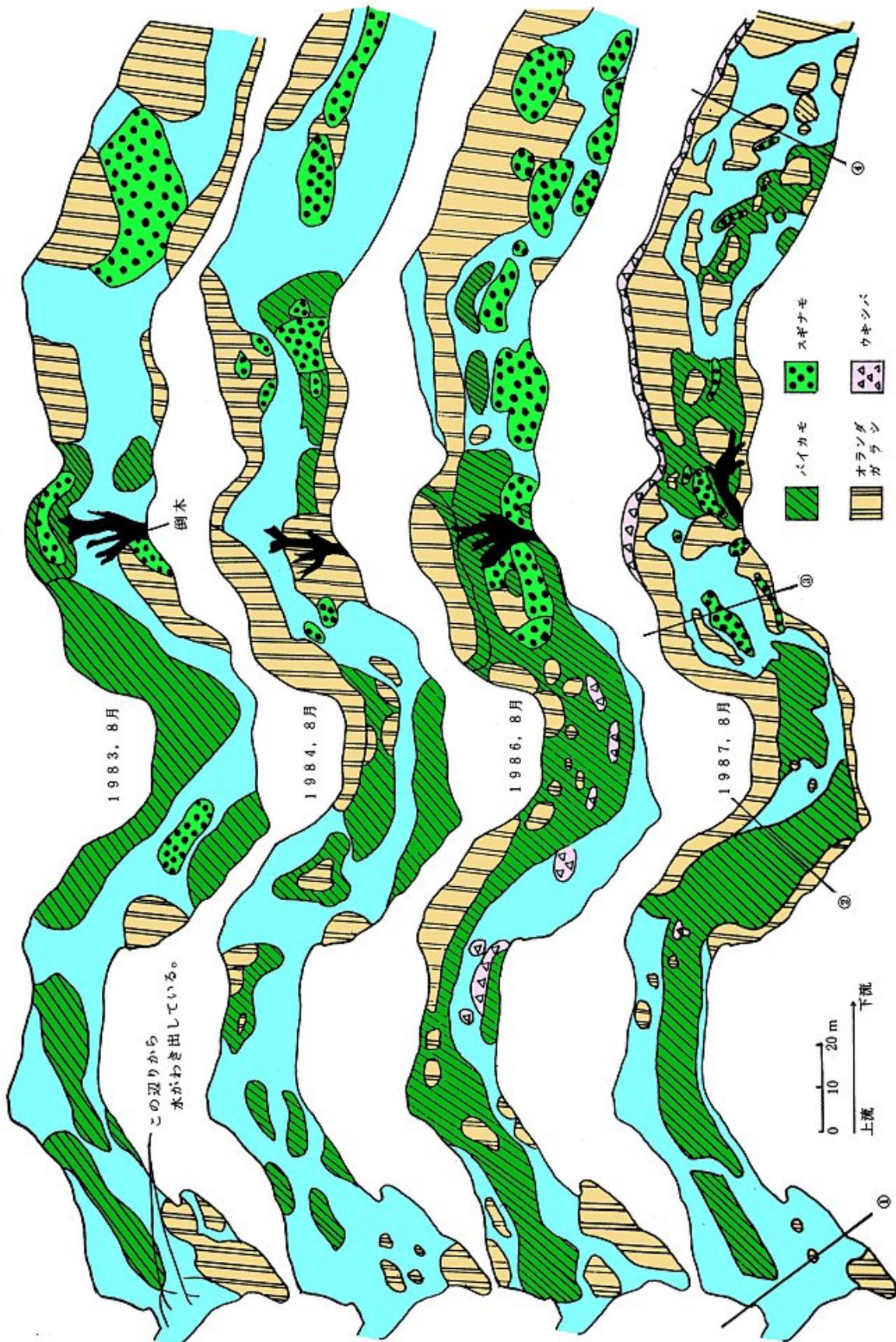
棟 方 プラナリアの北からと南からの分布状況を見たとき、この辺が接点になっているのではないかと聞きましたが、そしてこのグダリの調査結果がよく示している、というかそのことについては…。

小山内 ここには白い種類が2種います。キタシロズムシとキタシロカズメウズムシです。青森県のここにはいますが、ここから南にはいないのです。グダリが南限ということになります。これはスゴイ、大発見。なぜスゴイかという、いつの時代に陸上の生物が北からどう来て、南からどう来たか、という時代の接点にもつながります。

田代に2種いるということは、北からと南からの地質とかさまざまな要素と生物の分化の時期が一致したという考え方です。そういうことでここは非常に大切な場所ということになります。



石郷岡總一郎



[図5] 青森高校生物部による水草分布の年次ごとの変動(1983~1987年) (「やぶなべ」第30号、1987を改写) 図中にウキシバとあるが、ハイコヌカグサの誤り。

南ではナミウズムシというのがずっといます。これは北海道にはいません。ここにはいません。分岐点になりますね。ただこれは学術的にはまだキチンと説明されていません。もっと詳しく調べなければなりません。

南限と北限についてですが、ほ乳類では青森県が北限のものが圧倒的に多いのですが、地質的にいうと最終氷期の2万年前とかそれ以降になります。北の方からは青森止まりとしているものがありますが、もっと南まで行ったのかも知れません。南まで行ったのであれば、青森と同じような場所がいっぱいあるはずですが、そうでもない。

岩 淵 もう少しさかのぼって大陸と繋がっていた頃、大陸の川が岩手県の北部あたりまで流れていたという説があります。

小山内 それはオーバーだと思えます。

岩 淵 どうも私は地史というのをおかしいと思っています。今の説では津軽海峡ができた後にブナが北海道まで分布したことになります。ブナは道南まで分布しているでしょう。どう説明するか、と云ったら縄文人がタネを播いたと云った。(笑い)

棟 方 それはシロウトでも信用しませんよ。大学あたりで色々やっているのを聞いてもブナの分布については分かっていないことばかりです。

小山内 プラナリアというのは、その辺が非常に面白い。陸続きでないと北からくることができないのです。

棟 方 いま興味があるのは南限と北限のことで、プラナリアの場合グダリでスパッと分かれたということ。もっと詳しく調べればどうなるか分からないが、いずれにしてもグダリの貴重性の大きな要素で、グダリの説明にも分かりやすいことです。

山 道 もっと南の泉を探して調べてみないと結論はまだ出せません。南八甲田なんかにはないのか興味がありますね。

棟 方 八甲田には湧き水は方々にいっぱいありますが、グダリのようなところは他にはないでしょう。ずいぶん歩いていますが、私の知っている範囲ではありません。

細 井 質問、北限どうのこうので出てくるブラッキストンというのは、プレーキストンとも云っているがどっちですか。

【コラム】 青森高校生物部機関誌「やぶなべ」掲載のグダリ沼関連報告

- 第27号(1983年発行)
 - グダリ沼… 山谷香代
 - グダリ沼における水草の分布… 菊池俊一
 - グダリ沼の植物調査… 若松智子・赤平佐知子
 - グダリ沼の植物一覧… 若松智子・赤平佐知子・和泉晶子
- 28号(1984発行)
 - グダリ沼の調査(プラナリア)… 山田祥子・高橋真紀子
 - グダリ沼における水草の分布(第2回)… 長谷川一生
- 29号(1985年発行)
 - S60.8.7 グダリ沼の調査(Part3)… 山田祥子
 - プラナリア採集レポート… 三川智子
- 30号(1987発行)
 - 田代沼(グダリ沼)における水草の分布と変動について… 中田孝樹・古屋孝洋・館山清彦
 - 昭和61年9月のグダリ沼の調査(プラナリア)… 山道香
 - 昭和61年10月25日 グダリ沼の調査2(プラナリア)… 山道香

- 室 谷 読み方ですから色々ありますが、欧米著名人の読み方辞典ではブレイキストンになっています。
- 細 井 津軽海峡がブレイキストン・ラインというのもありましたが、南限、北限というのは議論がありますが、さまざまなロマンがあって楽しいですね。
- 室 谷 グダリのプラナリアについては、小山内さんに別にまとめて貰いましょう(51頁に小山内論考を掲載)。

今年のテーマ: プラナリアの南限・北限、植物相の詳しい調査

ー 環境保全と教育、費用対効果の原則 ー

- 室 谷 色々な話が出ましたが、論点を整理してシーズンに入ったら何をやろうか、を話したいと思います。
- 棟 方 私は、水生生物というとプラナリアの南限、北限をもっと学術的にせめて欲しい。これに関連して植物ではどうなのか、調べる必要がある。それから、確かにあの辺は溪畔林だと思う。だから自然の遷移にまかせてあまり人手を加えないで回復させるのが一番ではないか。その様子を継続的に記録していく。とくに行政にそういった考え方をもって欲しい。ボランティアではちょっとできないことです。
- 室 谷 さっき「東八甲田の保全」というのがあって、ちょっとそれを紹介しましたが、その後、何をしたかというともない。ただ、報告書を作っただけ、環境省に云われ、予算がついたから消化しなければならない。提言はしたが、その後のフォローはまったくない。あの報告書をまとめる前段で調査しているが、その担当者のひとりに聞いたら、その後は何も無いという。こうしよう、ああしよう、だから手伝ってくれとか、何にもないということでした。
- 棟 方 いつも云っているでしょう。結局は金の無駄遣いになってしまう。民と官の共同体を作ってやっていかないとダメ、もはや官には頼っておれないのです。きょうの話題からちょっとはずれますが、「やぶなべ会」とかこういう自然が好きでまじめにやっているところが、どのように絡んでいくかでしょう。私も、あの報告書を貰いましたが、ナンセンスだと思いました。
- 小山内 市ばかりでなく、県などがやっていることも似たり寄ったりですよ。本当は国がもっとやるべきことを云っている筈です。ところが後は何も手をつけていないのです。例えば生物の多様性があり、日本は関連した条約を結んでいます。それに基づいたことを2、3年後にはやらなければならないのに、国自体もパツとしていません。
- 室 谷 多様性の保全については、どれを対象にするかという基礎になる調査は県が中心になってやってきました。細井さんも私もこれには絡んでいます。2000年から報告書を出して、5年おきくらいに見直し調査をしていく、それで今は2010年に向けての作業が続けられています。ところが、その報告書を出しただけで終わりそうなんです。具体的に、積極的に多様性の保全についてどのようにしたら良いのか、その行動がないのです。



[写真18] トウホクコガタウズムシ(上)とキタシロカメウズムシ(下)

徳 差 この前、「青森の自然を考える会」が青森市長と懇談サロンをやりました。そのとき出席を要請されて出ました。市は色々なことをやっていますが、問題は費用対効果の問題です。つまり金を使ってその効果を期待するというのは経営というか民間の場合は当たり前のことです。絶対必要事項です。青森市の場合は、市長が経営感覚を公務員に植え付けるということでした。ところがそれがうまくいっているのでしょうか。



[写真19] 市民と市長の懇談サロンの様子 (2005.5.28)

それと懇談サロンで強調したかったのは、自然とか公園の場合は金を使ってでも、すぐに効果があがらなくても考えて欲しかったのです。具体的に青森市の「森の広場」をとりあげました。自然を残すべきところは残せば良い、金を使って壊すのはやめて欲しい。私たちがいま考えなければならないことは、これからの子どもたちの時代に何を残してやるかです。地球的な環境問題については金を使っていったらどうか、とくに子どもたちの環境教育を考えるべきではないかと。

これには、市当局も否定はしませんでした。これからはそういう時代です。オバマのグリーン・ニューデールではありませんが、地球規模の環境問題です。それは身近なところから始まりますし、これもその一つでしょう。

岩 淵 費用対効果であれば、たとえば「森の広場」で考えたときに、これをゼロから作るとしたらどの位、金がかかるかを考えなければなりません。

棟 方 いま、経済が破綻になったということは、そもそも何かということです。効率主義とか経済第一主義とか金だけでやって来ましたが、それがまず原点で、それではこれをどうするかということで、自然を正しく見るというのが根本になります。ですから最早、金がない予算がないという官を当てにするのではなくて民間が主体になってやる時代だと思えます。民と官と公、これちょっと意味が違うが共存する社会が一番大事だということです。環境面では、そこに自然に理解あるものがどう参画していくかです。

徳 差 官、公、民と云いましたが、やはり官が主導しないと難しい面があります。

棟 方 官はもはや指導できません。

徳 差 指導するとは何かというと、必要なことについては大胆にやって欲しいのです。私たちはタックス・ペアなんだから金を出します。何十億円などはあり得ませんが発想の仕方として教育的な観点から官はもっと力を入れて欲しい。それから、いま自己責任ということがよく云われていますが、官が行政のなかで個人の責任という考え方を強めています、あれではちょっと。

棟 方 例えば自然観察会などをやっているが、これは最早、官がリーダーではダメです。もっと



[図6] 2009年6月に地元関係者が中心になって「田代高原つつじの小径」を整備

効果的な方法があるはずで、民が公になってリードしないと、官がリードする形にはなりません。時代によってどんどん新しいことをやる必要がありますね。行政をリードしていくようできないとできません。

「やぶなべ会」の行政への貢献

一 顕著な具体的な成果 一

室 谷 グダリについて、私たちが環境を考える身近なテーマとして行政にも働きかけていく必要がありますね。それで、これまで蓄積してきたグダリの調査実績を活かすためにも「グダリの今」を確認する必要があります。たとえばプラナリアについて1980年代のデータと比較して今はどうなのか、何か大きな変化が出てきていないのか。そうすると、もっとも効果的なのは当時、調査に当たったひとたちにも参加して貰うことです。

小山内 熱心な女子部員がいました。それで今日の座談会にも参加を呼びかけたのですが、いま子育て最中でなかなか時間がとれないというのです。

室 谷 たとえば、夏の一日、昔の調査した季節にグダリと一緒にいって調べるとか。

小山内 わかりました。本人たちに見て貰えば本当に変わったと思うでしょう。プラナリアに限らず色々な生物の生態調査があります。同じ場所を基点として永年できるのはここが一番です。

そして自然の変化は変転極まりないのですが、こういう考え方でやっている生物学者は少ないと思います。植物でも動物でもガラリと変わってきています。

五十嵐(豊) 私も40年も研究生生活を続けてきました。長期間にわたって調べるとさまざまなことが分かってくるし、大切なことです。

室 谷 もうすぐ野外シーズンに入ります。きょうの皆さんからの話を整理して、いくつかのテーマと、いか方向性を決めさせていただきます。それを元にできるだけ現地に足を運んでいただいて、まとめたものを会報に記録したいと思います。

棟 方 あそこは私も大好きです。小山内さん、山道さんはプラナリアとか水生動物をやってください。南限、北限はぜひとも。植物を目標にしているひともいっぱいいます。私は風景を中心に見ていきます。

五十嵐(豊) 部誌「やぶなべ」を何冊か見ましたが、ずいぶん色々なことをやっていますね。

室 谷 そうなんです。30年かけて30号まで出ているんですが、きょう見ても貴重なものが多いのです。それらから重点的に20年以上前のことを選んで、これが今どうなっているかを見て、その比較結果を社会に公表していく、大きな社会貢献になると思います。

棟 方 徳差さんに反論するわけではありませんが、わが「やぶなべ会」は新幹線の新青森駅前のシンボルツリーをトドマツからヒバに変えてしまいました(図6)。すごい実績です。今まで行政主導でやってきたもので、彼らは審議会とか委員会を組織して、それを場合によっては隠れ



【図6】新幹線新青森駅シンボルツリーがトドマツからヒバに変更に(東奥日報、2008年6月17日付朝刊)

藪にして都合の良いようにやってきました。これに対して市民団体が修正をせまっても無力でした。それを私たちはキチンと是正させています。横内川の水源域のミズナラを伐採、ブナ植林がありましたが、あれを止めさせたのも「やぶなべ会」メンバーが主体でしたよ。

徳 差 それは分かります。良いものは大いに発信して欲しいです。何をやるにしても優先順位をつけて大いに発言、提言をするのは大切です。「やぶなべ会」メンバーは実践してきましたし、自然をよく見てモノを云っているのが強みだと思います。

棟 方 今の時代は、情報は即座に取り出すことができます、インターネットです。それで青森の自然環境についてパソコンでたたくとズラリと出てくるのは「やぶなべ会」メンバーによるものがたくさんあります。

さっき出た新駅のシンボルツリーですが、あのときの座談会の内容は石郷岡さんがPDFファイルにもして公開しました。最後に提言書をつけました。青森市議会の資料にもなったそうで、あれで青森市民は北海道のトドマツ選択で恥をかかないで済みました。

それともう一つ報告として皆さんに話しておきたいことがあります。前の「水環境座談会」でNHK放映番組の内容に誤りが多すぎるということがありましたね。その後、具体的にNHKと話し合いの機会があったのですが、残念なことにそれが中途半端な状態で未だ結論というか、理解を深めて貰うところまではいっていないのです。

室 谷 2008年1月発行の会報23号で水環境のテーマで話し合ったときに、小山内さんが「小学校の副教材が誤りだらけ」と云ったんです。ところが皆さんからNHK番組も問題が多すぎるとなりました、影響力が大きすぎると。そのまま会報に載せただけでは、「やぶなべ会」の独りよがりではないか、NHK青森放送局長に23号を送りましょう、と役員会で決まりそのようにしました。すると、さすがNHKの局長さんです。すぐ担当の放送部長に指示があつて、棟方さんと私がNHKに出向いて、部長にこれまでの問題番組について詳しく説明をしました。さすが全国放送番組のプロデューサーまで勤めたかただけあつて、問題点をキチンとメモしていたようです。資料も渡しました。いわく、「分かりました、すぐには出来ないかも知れませんが、必ずお返事をします。」ということでした。

棟 方 そうです、確か上局の、つまり代々木のNHKの本部ですね、ここのそれぞれの番組のスタッフに連絡して返事しますと約束しましたね。それがどうでしょう、約束から2か月も経たないうちに転勤してしまつたらしいのです。

【コラム】 NHK番組の自然理解への弊害事例(一部)

- 自然番組は誤りや情緒にながれることが多く、青森市のミズナラ伐採ブナ植林に影響した。(元岩手大学・石井教授の指摘)
- ブナ原生林について。白神山地をそのように伝えているが、ここは殆ど二次林である。『暗門山水観』を見ても伐採は明らか。
- ブナは優れた保水力があると伝えているが、専門家は広葉樹はもちろん、針葉樹とも変わらないとしている。
- ブナの樹幹流。一般現象の如く放映、しかも高い保水力との印象を与えている。

室 谷 それ、棟方さんが聞いたのは最近のことでしょう。われわれは1年も、いまか今かと待っていたのです。あちらだって組織で動いているわけで、指示した局長もいるわけですから、返事を待ちましょうよ。

それでは、“グダリ”と入力すれば「やぶなべ会ホームページ」がすぐ出てくるように、今回の企画は中身も充実したものに仕上げたいと思います。棟方さんがおっしゃるように政治を動かすような、そのような気力でやりたいと思います。それではとりあえず1年間かけての調査とそのまとめをしましょう。

まとめと提言

この座談会は2009年3月に開かれ、雪消えの季節からいくつかのテーマで数回の調査を行いました。8月2日には「やぶなべ会」としての観察会も行いました。調査結果からまとめたものは本誌本号に掲載することにしました。

これに加えて、「やぶなべ会」としての過去のデータの積み重ね、さらに今シーズンの詳細にわたる観察を踏まえてつぎのような提言を行うことで意見が一致しました。(28頁に掲載)

終わりに

グダリ沼についての座談会と、いくつかのテーマでの調査結果の発表、会としての提言をまとめることができましたが、残念でならないことは、調査に張り切っておられた二唐壽郎さんが7月に突然入院されご家族の看護、薬効の甲斐なく12月に逝かれてしまったことです。二唐さんが撮影を楽しみにしていたオオタカネバラを紙面に添えて、心からご冥福をお祈りします。

参考文献

吉井義次・吉岡邦二・岩田悦行、1940

牧野の生態学的研究(1)萱野原放牧地。生態学研究,第6巻25-48頁。

吉井義次・吉岡邦二、1941 牧野の生態学的研究(3)田代放牧地。生態学研究,第7巻74-88頁。

青森市、1958 青森市勢要覧。青森市市制施行60周年記念版。

青森市、2001 東八甲田地区「自然の保全と利用」基本構想」

—身近で多様な自然のワイズユースを目指して—。

グダリ沼・田代湿原の植生・景観保全のための提言

1. グダリ沼は水量が減少し源流部では、本来の植生が衰退しているが、中流・下流域では本来の景観は維持されている事。
2. 田代高原のヤナギランはロープで立ち入り規制はしているが、肝心の刈り払いや野焼きをしないため、衰退の一途を辿っている事。
3. 田代湿原は乾燥化により、葦、笹が侵入し本来の湿原植物が減少の一途を辿って生物多様性が失われつつある事。
4. しかしながらごく一部に、本来の植生が維持されていて希少価値が高まっている事。
5. 田代高原は、岩手八幡平市の安比高原に較べて環境・交通の便に恵まれている割には、景観保持の努力がなされていない事。
6. 総括として、グダリ沼の名の由来を会として明確に規定すると共に必要な施策については、会として発言したい事。

2010年3月31日

自然を見つめる「やぶなべ会」